

旧約聖書を読んで感じること(110) コヘレトの言葉 「最良の人生」

最近私は認知症の高齢者についての報道を他人事とは思わずに、見聞きしています。いずれ、否、現在の我が身かも、と思ってしまいます。知識、記憶、知能、知覚がうまく働かない脳の問題は、高齢者だけではなく、様々な知的障害を持っている人の問題でもあります。教会の中でも、脳の働きが十分に機能していない人間は疎外されていると感じる時があります。知識、知能が機能していなくても、「主を畏れることが知恵の初め」であるならば、神の前に立つ人間、立たされていると信じる人間は、誰でも、神の恵みを知る者、すなわち「知恵ある者」だと思っています。



何事にも時が(コヘ 3:1) John August Swanson

死が平等に与えられることだけは確実なのです。すべての人は神の手の中にある、したがって賢者も愚者も神のものであるということを悟ります。「太陽の下、飲み食いし、労苦によって魂を満足させ、愛する妻と共に楽しく生きること以上の幸福はない。」(コヘ 9:1-18)と繰り返しています。コヘレトは最良で、最も幸せな人生は「食が足り、労働を喜び、愛し合う庶民の生活」だと言うのです。

コヘレトは知恵ある者が、陥る姿として、競争心、孤独、過重な労苦、深酒などを挙げています。善人であるがゆえに滅びることもあると言っています。また、誤解、思わぬ不運、災難、不幸などが降りかかり、知恵によっても対処できない悲劇もあります。また賢者も罪に陥ることを知っています。

コヘレトの言葉を読んで特徴的だと感じることは、著者はこの世を「天の下の出来事」、あるいは「太陽の下」と見なしている点です。上から目線とでもいうのでしょうか、知恵あると自認する人はそれがありません。そして、コヘレトの悲しい特徴は、焦って口を開き、心せいて神の前に言葉を出そうとするな。神は天にいまし、あなたは地上にいる。言葉数を少なくせよ。(コヘ5:1)という箇所に見られるように、自分を謙遜な立場に置くために、自由さを失い、祈るという思いがないことです。また、コヘレトほどの知恵を持ち、様々な豊かさを享受しながらも、そのような恵みを与えられたことを感謝する思いが全くない、ひねくれ者であることも彼の傷です。ただし見よ、見いだしたことがある。神は人間をまっすぐに造られたが、人間は複雑な考え方をしたがる、ということ。(コヘ 7:29)コヘレトの生き方と対照的なパウロの言葉をつい思い出します。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝なさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」(1テサ 5:16-18)

最後にコヘレトは、若者よ、お前の若さを喜ぶがよい。青年時代を楽しく過ごせ。心にかなう道を、目に映るところに従って行け。知っておくがよい、神はそれらすべてについて、お前を裁きの座に連れて行かれると。(コヘ 11:9)と、若者に希望を託しています。青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。(コヘ 12:1a)自由に、おおらかに、楽しみつつ、歩むようにすすめ、純真な頃に与えられた信仰の大切さを説いています。そして「神を畏れる信仰が人生のすべてだ」と、諭しています。